朝倉・大澤理論 60 周年記念シンポジウム

平成 26 年は、1954 年に米国の Journal of Chemical Physics という学術雑誌に発表された論文（朝倉・大澤理論）の 60 周年に当たります（S. Asakura and F. Oosawa, *Journal of Chemical Physics* 22, 1255-1256 (1954)）。この理論は元々、高分子溶液中のコロイド粒子間に、実効的に引力が働くことを示したものであり、1954 年に、名大理学部物理学科の朝倉昌氏と大澤文夫氏によって初めて示されました。その引力（枯渇力とも呼ばれます）は、コロイド同士が近づき会合することでまわりの溶媒分子の配置のエントロピーが増加することが駆動力となっていると解釈できます。朝倉・大澤理論はその後、コロイド以外でも、様々な物理現象にも適用されて、細胞内のタンパク質分子の混み合い問題から界面科学などの相転移と臨界現象問題において近年特に注目を集めるようになっています。3 月 14 日と 15 日に、朝倉氏、大澤氏、国内外の著名な研究者を招聘して、60 周年記念国際会議を名大にて開催しました。約 100 名の参加を得ましたが、91 歳の大澤氏の 2 時間余りに及ぶ講演も大好評で、感動的な国際会議となりました。（岡本 祐幸）

大澤文夫氏（左）と朝倉昌氏（右）